

この先のことは分かりませんが、夏に渥美半島に漂着したメヒルギが、真水と砂を入れたコップの中で根を張り、子葉から本葉が出るまで成長したことをお知らせします。

和歌山県白浜町に所在する 京都大学瀬戸臨海実験所“南浜”へ オオミズナギドリ（ミズナギドリ科）が漂着

久保田 信*

Calonectoris leucomelas (Procellariidae) washed ashore in “Minamihama beach” of the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University in Shirahama Town, Wakayama Prefecture, Japan

Shin Kubota*

*〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所

* Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, Shirahama Town 459, Nishimuro, Wakayama Prefecture 649-2211, Japan
kubota.shin.5e@kyoto-u.ac.jp

和歌山県西牟婁郡白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所の近郊へ、純海洋性の鳥類で太平洋を一周する旅鳥ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* と、ミズナギドリ類では日本最大種で集団繁殖地の多くが天然記念物として保護されているオオミズナギドリ *Calonectoris leucomelas* が漂着した記録がある(久保田, 2006; 久保田, 2012)。今回、再びオオミズナギドリの一羽が実験所“南浜”に 2017 年 9 月 26 日に死亡漂着した(図 1) ので、本種の第二の漂着記録をする。

謝辞

和歌山県財政課の谷協智和氏に同定して頂いたので深謝致します。

引用文献

久保田 信. 2006. 和歌山県田辺湾周辺海域へのハシボソミズナギドリ（ミズナギドリ科）の漂着. 漂着物学会誌, 4: 43-44.

久保田 信. 2012. 京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”とその近郊海域へのハシボソミズナギドリとオオミズナギドリ（ミズナギドリ科）の漂着. 京都大学瀬戸臨海実験所年報, 25: 42-43.



図 1. 2017 年 9 月 26 日に和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“南浜”に死亡漂着したオオミズナギドリ

和歌山県白浜町に所在する 京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”で初めて 生育したオカヒジキ（ヒユ科 / アカザ科）

久保田 信*

First growing of *Salsola komarovii* (Amaranthaceae/Chenopodiaceae) at “Kitahama beach” of the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University, Shirahama Town, Wakayama Prefecture, Japan

Shin Kubota*

*〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所

* Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, Shirahama Town 459, Nishimuro, Wakayama Prefecture 649-2211, Japan
kubota.shin.5e@kyoto-u.ac.jp

わが国の海岸の砂地に見られる一年草のオカヒジキ *Salsola komarovii* Ilijin は、北海道から沖縄までの日本全土に分布する他、中国、韓国、ロシアのウスリー地方、サハリン等にも分布する(大井, 1972; 横川・澤田, 2017)。陸のヒジキを意味する本種は、緑色の葉が海藻のミルに類似しているのでミルナ(牧野, 1961; 向井, 2017)とも呼ばれる。今回、和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”(砂浜部の長さが直線距離で約 400 m)で、2017 年にこの約 20 年間で初めて複数個体が生育したので記録する。

2016 年 6 月—9 月にかけて、北浜で 3 個体が生育・成長した。全個体とも満潮線ぎりぎりに生えており、海水をかぶる場所で生育していた。その内の 2 個体は枝数が数本と少なく、枝の長さも短く(最長で 12.5 cm)まだ幼体であったが(図 1)、残りの 1 個体は 6 月の発見時には既によく生育しており、7 月下旬にはさらに大きくなり最長の枝が 46 cm であった(図 2)。開花があったかどうかは確認していない。その後、相次ぐ台風等の荒波により全個体が流失し、それ以降、少なくとも 2 カ月経過しても再び現れることはなかった。

生育場所からの流失については、北浜で稀に見られるゲンバイヒルガオ(久保田・田名瀬, 2017)と同じ様な運命をたどる植物だと言える。今回の結果からも、オカヒジキは打上群落の一員とされる(中西, 2008)のが確認された。なお、本種のごく小さな芽生えが北浜にこれまで気が付か



図 1 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所北浜で発見されたオカヒジキ(2017 年 7 月 25 日撮影)